

登録景観資源の特性と評価手法に関する研究

—大阪市都市景観資源の事例分析を通して—

Study on the Characteristics and Evaluation Methods of Registered Landscape Resources:

Case Study of Osaka City's Urban Landscape Resources

○矢野 真佑奈（神戸大学大学院）^{*1} 栗山尚子（神戸大学大学院）^{*2}

^{*1} Mayuna YANO, Kobe University, 1-1 Rokkodai, Nada, Kobe, Hyogo, 657-8501, 240t062t@stu.kobe-u.ac.jp

^{*2} Naoko KURIYAMA, Kobe University, 1-1 Rokkodai, Nada, Kobe, Hyogo, 657-8501, kuri@kobe-u.ac.jp

キーワード：景観資源、評価手法、大阪市、テキストマイニング

1. 研究の背景・目的・方法

近年、日本の様々な都市では、地域らしい景観形成を促すために景観に寄与する資源等を指定する制度が運用されている。しかし、それらの制度で指定されている資源の大半は歴史的な価値を有する建築物等が対象とされており、文化財と同様に歴史的価値を重視する評価以外の手法が十分に確立されていない。つまり、建築物以外の景観構成要素である水辺空間や道、竣工後50年以上経過していない現代建築物に対する評価の視点が定まっていない。そういった現状に対応し、近年では、各自治体が独自に制度を設定して、文化財といった歴史的資源や建築物に限定せず、地域の景観資源を指定ではなく登録する仕組みが存在する。そこで本稿では、登録景観資源制度が運用されている大阪市都市景観資源を対象として、テキストマイニングを用いて、概要と講評文の記述を解析することで、登録景観資源の特性・評価手法に関する知見を得ることを目的とする。

景観資源の価値評価に関する既往研究は、景観資源を分類し、その実態と制度コンセプトの関連性を分析した高橋ら⁽¹⁾の研究や、歴史的建築物が多い地区での景観的価値・場所価値について述べた曾根ら⁽²⁾の研究がある。高垣ら⁽³⁾は、神戸市の現代建築物を対象として景観資源としての評価を研究したが、建築物以外の評価を行なっていない。建築物以外の景観構成要素と現代建築物も含めて、景観資源として評価する点が本研究の新規性である。

研究方法について述べる。本稿では、大阪市の都市景観資源を対象とする。まずは、登録景観資源制度の概要を整理した上で、都市景観資源を建築物の種別や公共空間の種別ごとに12に分類する。そして、市のホームページ⁽⁴⁾に記載されている「概要」及び「講評」の記述を対象とし、テキストマイニングのソフトウェアである KH Coder 3.Beta.03i（樋口 2020）を用いて解析を行う。そして、そこから得られた情報を元に、都市景観資源の評価項目やその特徴に着目し、分析を行う。

本稿は全4章から構成され、第1章では研究の背景・目的・方法等を整理し、第2章で大阪市登録景観資源制度の

特徴把握を行う。第3章でKH Coderを用いた分析を行い、第4章でこれらをとりまとめて、結論を記す。

2. 大阪市登録景観資源制度の特徴把握

本稿では、登録景観資源制度の実態に関する知見を得るために、大阪市の該当ホームページ⁽⁴⁾の調査と、景観担当部署へのヒアリング調査を行った。ヒアリング調査は、2024年2月26日9:00-10:30に面対で実施した。本章では、ホームページ調査・ヒアリング調査で得た情報を元に、登録景観資源制度の概要の整理を行う。

2.1. 制度の概要

大阪市は、大阪市都市景観条例第33条に基づく都市景観資源の制度を運用している。都市景観資源は、わがまちナイススポットとも呼ばれている。市のホームページ⁽⁵⁾の更新日（2025/4/9）時点では434件が登録されている。制度の目的は、景観形成上の大切な資源を、一人でも多くの方々に知っていただき、地域の景観づくりの中で積極的に活用していただくためとしている。

都市景観資源に対して、市は補助金を出しておらず、所有者が自己の責任で建物等の維持管理を行う。また、外観の変更についての届出義務がないため、外観が変わっている都市景観資源がある。区が年に1回、都市景観資源の現況を確認しに行って、外観の変更が著しいものは、登録を解除するか、登録し直すかを検討する。解体されたものは解体の手続きを行う。登録する都市景観資源は、区民の愛着があれば登録するというスタンスであり、区民公募→区の推薦→現地調査→審査→意向確認→登録告示・登録証交付の流れで登録される。

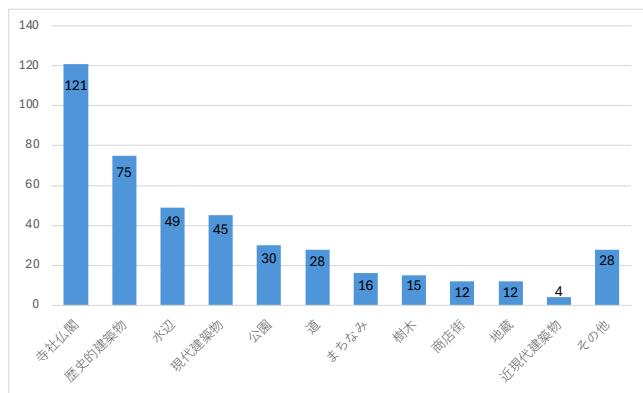
2.2. 大阪市都市景観資源の特徴

大阪市の都市景観資源は、指定景観資源であった22件が、登録制度が創設されて以降、登録資源に変更がなされた（平成15年4月と平成16年10月登録）。その後は、区単位での都市景観資源の申し出があり、登録を進めていることから、都市景観資源登録リストには別々に資源の名称と所在地が記されている。分析を実施した2024年11月4日時点では、435件が登録されていたが、2025年4月9日

に、1件が登録解除となっている。本稿では、2024年11月4日時点での都市景観資源435件を対象に分析を行う。

登録景観資源の特徴を捉えるため、分類して集計を行った。その結果をまとめたグラフが図1である。寺と神社を寺社仏閣、寺社仏閣以外の歴史的な建築物を歴史的建築物とした。河川敷や橋など水に関わる空間を水辺とした。現代建築物は戦後に竣工された建築物で、近現代建築物は、竣工時期が戦前から戦後にかけてであり、現代建築物と言いたい切れなかったものを分類した。公園は緑地・庭園も含んでいる。

435件のうち最もも多い景観資源が寺社仏閣(121件)、次いで歴史的建築物(75件)である。また、水辺に関する空間も49件登録されている。現代建築物は45件登録されており、第4位となっている。公園(30件)、道(28件)、まちなみ(16件)、樹木(15件)といった建築物以外の景観資源も複数登録されている。また、景観資源として珍しいものとしては、商店街や地蔵といった登録景観資源である。その他には、看板(天神橋筋商店街の看板、道頓堀グリコサイン)、道標、古墳、碑、路面電車といったものがみられる。



Note: The correspondence between Japanese and English terms in the figure is as follows:

“寺社仏閣”=Temples and Shrines, “歴史的建築物”=Historic Architecture, “水辺”=Waterfront Areas, “現代建築物”=Modern Architecture, “公園”=Parks, “道”=Roads, “まちなみ”=Townscapes, “樹木”=Trees, “商店街”=Shopping Streets, “地蔵”=Jizo Statues, “近現代建築物”=Modern and Contemporary Architecture, “その他”=Other.

Fig.1 Number of cases by category

3. KH Coderによる特徴分析

本章では、テキストマイニングのソフトウェアであるKH Coderを用いた分析を行い、頻出語の傾向や語同士の共起関係、語彙分布の特徴を明らかにすることで、景観資源がどのような観点から評価されているのかを定量的に明確化する。本研究では、全ての分類について同様の分析を行なったが、本稿では全体での分析に加え、歴史的建築物、水辺空間を対象として結果を示す。これら二分類を抽出した理由は、①他の分類と比較して景観資源数が多く、データの信頼性が高いこと、②後述する大阪市全体の分析において見出された「歴史性」と「地域性」という二軸をそれぞれ代表的に示す分類であることによる。

3.1. 全体の分析

大阪市の全都市景観資源435件を対象に、KH Coderを用いて分析を行った。都市景観資源における「概要」「講評」の記述に含まれるすべての語の延べ数である総抽出語数は78226語(2691文)であった。

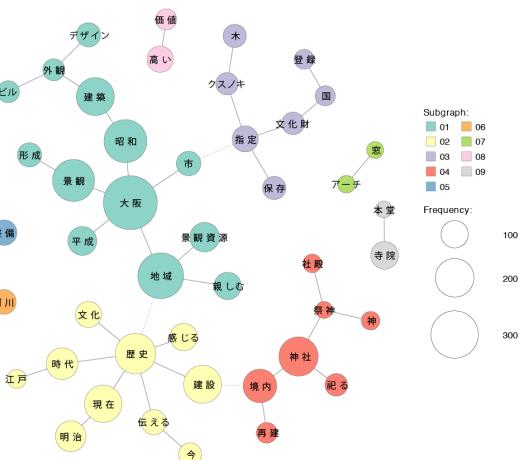
3.1.1. 頻出語の抽出 都市景観資源の記述で抽出された頻出語上位30語を表1に示した。出現回数が多い順に「大阪」389回、「地域」280回、「昭和」249回、「景観」237回となった。「歴史」について多くの景観資源において言及されていた。また、「神社」「建築」「境内」「公園」「橋」「寺院」等の景観資源そのものに関する語が多く抽出された。動詞については「親しむ」「感じる」「伝える」といった語が多く抽出されており、人の主観的な意見や感情、経験を通じた価値が多く評価されていると考えられる。

Table.1 List of Frequently Occurring Words Extracted from Descriptions of Urban Landscape Resources (Top 30 Words)

抽出語 Extracted Words	出現回数 Frequency	抽出語 Extracted Words	出現回数 Frequency
大阪 Osaka	389	橋 Bridge	102
地域 Region	280	寺院 Temple	101
昭和 Showa	249	親しむ Familiar	100
景観 Landscape	237	感じる Feel	99
歴史 History	221	貴重 Precious	96
神社 Shrine	205	高い High	93
建設 Construction	194	文化 Culture	91
建築 Architecture	194	指定 Designated	90
現在 Present	186	大正 Taisho	87
境内 Precincts	151	整備 Maintenance	85
公園 Park	146	街道 Highway	83
時代 Era	133	伝える Convey	83
明治 Meiji	125	河川 River	81
景観資源 Landscape Resources	116	市 City	79
平成 Heisei	110	特徴 Feature	79

3.1.2. 共起ネットワークによる抽出語の共起関係 最小出現回数を35として分析を行った共起ネットワークを

図で表したもののが図2である。「地域」「親しむ」という単語が「大阪」と共起しており、繋がりが強い。このことから、地域性を持つものが景観資源として評価されていると考えられる。「大阪」を中心とする集団に加え、「神社」の集団、「歴史」の集団、「建築」の集団、「文化財」の集団、「公園」の集団が確認できた。神社については、神社の境内が評価されているという特徴が読み取れる。歴史については、「感じる」「伝える」「現在」という単語が共起していることから、景観資源が持つ歴史を感じられる点や、今まで伝承されている点が評価に影響していると考えられる。建築については、「外観」「デザイン」等の単語が共起しており、建築そのものが景観として評価されている。文化財については、「指定」「国」等の単語が共起しており、文化財指定など既存の制度によって保全・評価されている点が、景観資源としての価値を形成する一因となっている。公園については、整備状況や緑化が評価に影響していると読み取れる。「木」に関しては、制度に登録されているものが多く見られたため、文化財の集団と共に起していると考えられる。



Note: The correspondence between Japanese and English terms in the figure is as follows:

“ビル”= Building, “外観”= Exterior, “デザイン”= Design, “建築”= Architecture, “昭和”= The Showa Period, “大阪”= Osaka, “景観”= Landscape, “形成”= Formation, “市”= City, “平成”= The Heisei Period, “地域”= Region, “景観資源”= Landscape Resource, “親しむ”= Familiarity, “価値”= Value, “高い”= High, “木”= Tree, “クスノキ”= Camphor Tree, “指定”= Designation, “文化財”= Cultural Property, “国”= National, “登録”= Registration, “保存”= Preservation, “緑”= Green, “公園”= Park, “場”= Space, “整備”= Development, “アーチ”= Arch, “窓”= Window, “本堂”= Main Hall, “寺院”= Temple, “水”= Water, “河川”= River, “文化”= Culture, “江戸”= The Edo Period, “時代”= Period, “現在”= Present, “明治”= The Meiji Period, “感じる”= Feel, “歴史”= History, “伝える”= Convey, “今”= Now, “建設”= Construction, “境内”= Precincts, “再建”= Rebuild, “祀る”= Worship, “神社”= Shrine, “社殿”= Shrine Building, “祭神”= Deity Enshrined, “神”= God.

Fig.2 Co-occurrence Network of Descriptions of Urban Landscape Resources

3.1.3. 対応分析による抽出語と各分類の関連把握 全都市景観資源における対応分析の結果を図で表したもののが図3である。12の分類をカテゴリー変数として導入しており、出現数が多い単語ほど大きな円でプロットされている。この図において、横軸は「神社」「寺院」等の寺社仏閣に関する語や、「木」「クスノキ」等の樹木に関する語の得点が

低く、「平成」「利用」等の現代建築物に関する語や「河川」「橋」等の水辺に関する語の得点が高くなっていることから、[時代の流れ]と解釈した、縦軸は、「人々」「親しむ」や「場所」の得点が高く、「住宅」「建築」や「文化財」の得点が低いことから、[人関与の程度]と解釈した。

水辺群と公園群は近くに位置していることから、似たような評価項目が用いられていると言える。「人」「空間」「公園」「河川」が特徴の方向に配置されていることから、これらが水辺群や公園群の評価項目の特徴である。すなわち、水辺や公園においては、人との関わりや空間の質が重視されていると考えられる。「橋」については、水辺群の方向で原点から離れた位置にプロットされているため、特異的な項目である。

寺社仏閣群と樹木群も近くに位置しており、本文を参照したところ、寺社仏閣内の樹木が評価されている場合が多くあるため、評価項目に似た特徴を持っていると考えられる。

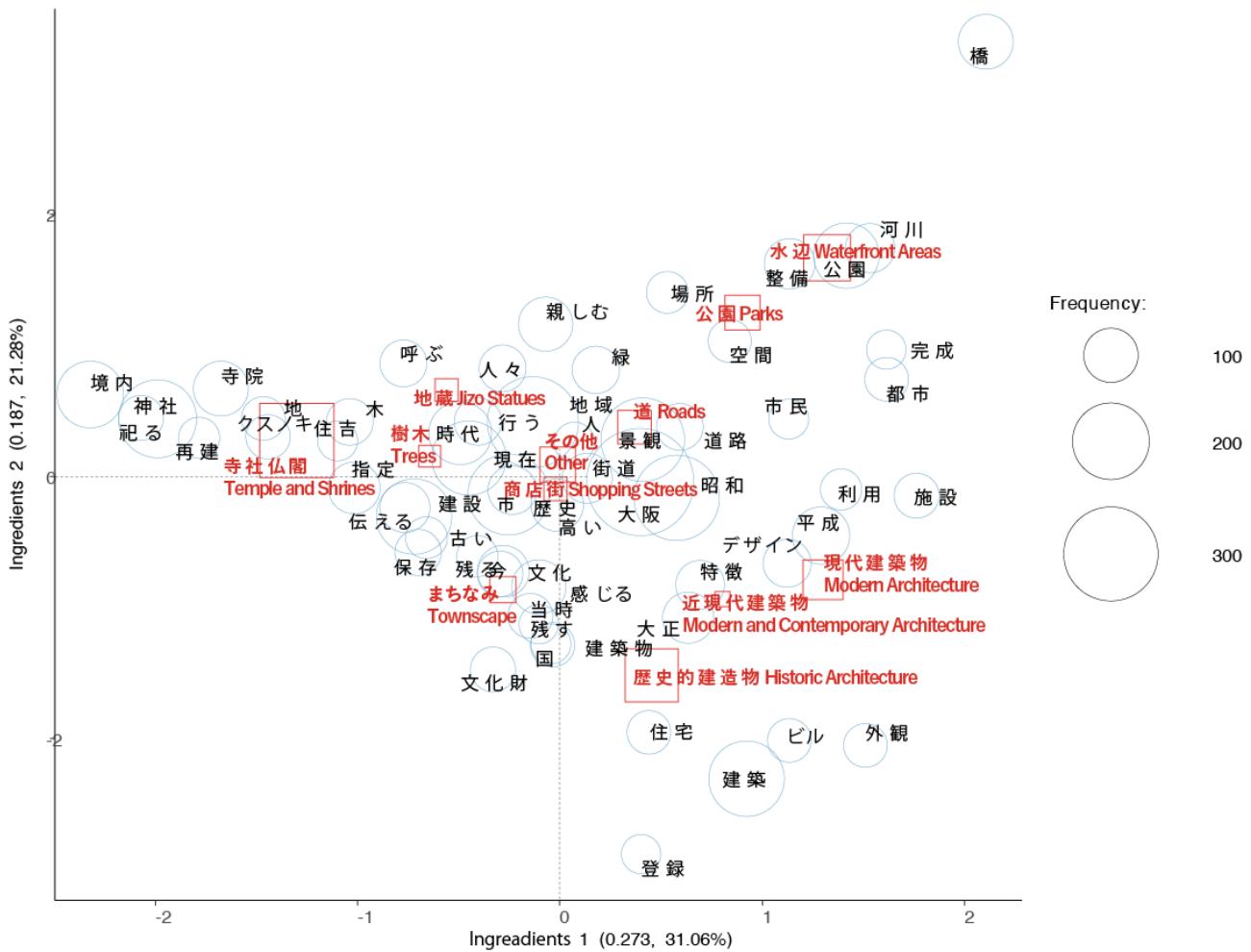
歴史的建築物群、近現代建築物群、現代建築物群については、近くに「建築」「外観」等の単語がプロットされることから、年代に関係なく外観が評価に影響していることが明らかとなった。歴史的建築物群においては、「残す」「文化財」という単語が近くに位置しており、歴史性や文化的価値を評価する要素が強い。一方で、現代建築物群においては、「デザイン」や「利用」「施設」等の建築物の用途に関する語が近くにプロットされているため、歴史的建築物群や近現代建築物群と比較して、よりデザイン性が重視されており、さらに、利用者目線で建築物の機能を評価する要素が強い。これらから、建築物においては、成立時期によって評価視点が異なっていることが推測される。

3.1.4 全体分析の考察

3.1.4. 地域分析の考察 より、拙山語アートから、「地域」「歴史」「現在」「大阪」などが多く出現したことから、景観資源が物理的構造物としてではなく、人々との関係性や文化的背景を通じて価値づけられていることが読み取れる。共起ネットワークでは、「大阪」を中心とする共起関係から、大阪市の景観資源は、市民の日常的な関わりや文化的記憶が評価に影響していると考えられる。その中でも、

「神社」「歴史性」「文化財」「建築」「公園」が景観資源として多く評価されている傾向が見られた。対応分析では、[時代の流れ]と[人関与の程度]に二軸によって景観資源の評価の位置付けを整理することができ、各資源がそれぞれ異なる文脈で評価されていることが明確となった。水辺や公園においては、人との関わりや空間の質が重視されており、寺社仏閣や樹木においては、精神的・歴史的な価値が評価の中心となっている。建築物においては、歴史的建築物では保存の程度や歴史・文化的価値が重視されるのに対し、現代建築物ではデザイン性や機能性が評価されており、建築物が成立した時期によって評価視点が異なっていることが推測される。

全体の分析結果から、大阪市の都市景観資源では、過去から受け継がれた価値である歴史性と、現在の関わりから生まれる価値である地域性の2点が大きな評価項目となっている。前者については、外在的・客観的な「記憶された時間・事実」が評価されており、社会的・制度的に認識されやすい歴史的建築物や寺社仏閣、樹木において重視されている。後者については、内在的・主観的な「暮らしとの



Note: The correspondence between Japanese and English terms in the figure is as follows:
 “場所” = Place, “空間” = Space, “整備” = Development, “公園” = Parks, “河川” = River, “完成” = Completion, “都市” = City, “境内” = Precincts, “祀る” = Worship, “神社” = Shrine, “再建” = Rebuild, “寺院” = Temple, “クスノキ” = Camphor Tree, “地” = Land, “住吉” = Sumiyoshi, “木” = Tree, “指定” = Designated, “呼ぶ” = Call, “人々” = People, “親しむ” = Familiar, “緑” = Green, “時代” = Period, “行う” = Carry out, “地域” = Region, “人” = People, “景観” = Landscape, “道路” = Road, “市民” = Citizens, “現在” = Present, “街道” = Street, “昭和” = The Showa Period, “伝える” = Convey, “建設” = Construction, “市” = City, “歴史” = History, “高い” = High, “大阪” = Osaka, “古い” = Old, “保存” = Preservation, “残る” = Remain, “今” = Now, “特徴” = Feature, “デザイン” = Design, “平成” = The Heisei Period, “利用” = Utilize, “施設” = Facility, “文化” = Culture, “感じる” = Feel, “当時” = Contemporary, “残す” = Preserve, “大正” = The Taisho Period, “文化財” = Cultural Property, “国” = Nation, “建築物” = Structures, “住宅” = Housing, “建築” = Architecture, “ビル” = Building, “外観” = Exterior, “登録” = Registration.

Fig.3 Results of the correspondence analysis

関わり」が生み出す価値が評価されており、個人や地域社会の記憶・感情によって形成される公園や水辺、地蔵、道等で重視されている。

3.2. 歴史的建築物の分析

歴史的建築物における「概要」「講評」の記述に含まれるすべての語の延べ数である総抽出語数は12146語(466文)であった。そのうち、助詞や助動詞などを除外し、分析に使用された語数は5498語である。

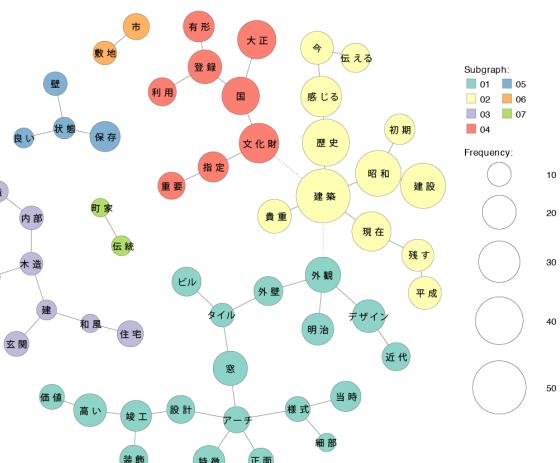
3.2.1. 頻出語の抽出 歴史的建築物の記述で抽出された頻出語上位30語を表2に示した。出現回数が多い順に「建築」107回、「昭和」69回、「大阪」66回、「歴史」49回となった。最も出現回数の多い「建築」では、「明治大阪の名建築である」(大阪府立中之島図書館),「全国で最も古い洋風建築の一つである」(泉布観)等の記述が見られたことから、建築物そのものの価値や、歴史に関連する語が多く

く抽出された。「大阪」については、概要説明として頻出していることが結果として現れているが、「大正、昭和を通じて近代都市大阪の顔として市民に愛されてきた」(大阪市中央公会堂)等の記述が見られることから、昔からの市民の愛着やシンボル性も評価されていると考えられる。

3.2.2. 共起ネットワークによる抽出語の共起関係 特徴語上位75語を対象として分析を行った共起ネットワークを図で表したもののが図4である。「デザイン」と「窓」「タイル」「アーチ」が共起関係にあることから、これらの外観デザインが評価されている。歴史的建築物の中でも、近代建築物の多い大阪では、近代建築の特徴的な意匠が評価されていると考えられる。また、「歴史」「貴重」等の単語が「建築」と繋がりが強いことが確認できた。さらに、「感じる」という主観的な動詞が「歴史」と結びついていることから、人々がその建築物の歴史を感じることができるかどうかが評価に関係している。

Table 2. List of Frequently Occurring Words Extracted from Descriptions of Historic Architecture (Top 30 Words)

抽出語 Extracted Words	出現回数 Frequency	抽出語 Extracted Words	出現回数 Frequency
建築 Architecture	107	住宅 Residence	26
昭和 Showa	69	国 Nation	25
大阪 Osaka	66	デザイン Design	24
歴史 History	49	建築物 Structure	24
建設 Construction	44	平成 Heisei	24
登録 Registration	41	明治 Meiji	23
大正 Taisho	40	貴重 Precious	22
景観 Landscape	39	特徴 Feature	21
窓 Window	35	高い High	21
文化財 Cultural Property	34	残す Preserve	21
現在 Present	33	当時 Contemporary	21
感じる Feel	31	外壁 Facade	20
地域 Region	31	今 Now	20
ビル Building	28	設計 Design	19
外観 Exterior	26	文化 Culture	19



Note: The correspondence between Japanese and English terms in the figure is as follows:

“壁” = Wall, “良い”=Good, “状態” = Condition, “保存”= Preservation, “敷地”= Site, “市”= City, “有形”= Tangible, “利用”= Utilization, “登録”= Registration, “大正”= Taisho, “国”= Nation, “重要”= Important, “指定”= Designation, “文化財”= Cultural Property, “伝える”= Convey, “今”= Now, “感じる”= Feel, “歴史”= History, “初期”= Initial, “昭和”= The Showa Period, “建設”= Construction, “貴重”= Precious, “建築”= Architecture, “現在”= Present, “残す”= Preserve, “平成”= The Heisei Period, “伝統”= Tradition, “町屋”= Townhouse, “造”= Structure, “内部”= Interior, “門” = Gate, “木造”= Wooden, “玄関”= Entrance, “建”= Build, “和風”= Japanese-style, “住宅”= Residence, “外壁”= Facade, “明治”= The Meiji Period, “外観”= Exterior, “デザイン”= Design, “近代”= Modern, “ビル”= Building, “タイル”= Tile, “窓”= Window, “価値”= Value, “高い” = High, “装飾”= Ornament, “施工”= Construction, “設計”= Design, “特徴”= Feature, “正面”= Front, “アーチ”= Arch, “細部”= Detail, “様式”= Style, “当時”= At the time.

Fig.4 Co-occurrence Network of Descriptions for Historical Buildings

3.2.3. 歴史的建築物の考察 まず、抽出語リストから、建築物の持つ歴史や外観、文化的な価値が評価されているとわかる。共起ネットワークにおいても、「窓」「アーチ」「装飾」等の外観デザインを示す言葉や、「貴重」「指定」「文化財」等の歴史性を評価する言葉が、抽出語リストにおいて出現回数の多い語と共にしている。また、「感じる」という語が多く出現している点や、「感じる」「伝える」といった市民の感情を示す語が「建築」「歴史」と共起している点から、歴史的建築物では、従来の指定制度と同様の歴史性を重視した評価項目に加え、地域住民が建築物の歴史を実感できるものであるかどうかが評価に関係すると考えられる。

3.3. 水辺の分析

水辺における「概要」「講評」の記述に含まれるすべての語の延べ数である総抽出語数は9353語(301文)であった。そのうち、助詞や助動詞などを除外し、分析に使用された語数は4126語である。

3.3.1. 頻出語の抽出 水辺の記述で抽出された頻出語上位30語を表3に示した。出現回数が多い順に「橋」73回、「景観」50回、「大阪」48回、「昭和」40回となった。最も出現回数の多い「橋」では、「アーチの両端にロマネスク風の昇降口があり、橋の景観を高めている」(桜宮橋), 「世界でも珍しいモノケーブル自碇式吊橋と呼ばれる形式で」(此花大橋)といった記述が見られたことから、「アーチ」「橋梁」等の橋の構造や形態に関する語も多く抽出された。また、「上流からも下流からも遠望のきく美しい橋」(菅

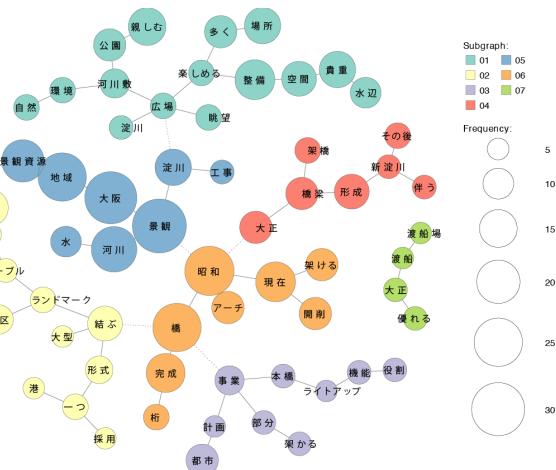
Table 3. List of Frequently Occurring Words Extracted from Descriptions of Waterfront Areas (Top 30 Words)

抽出語 Extracted Words	出現回数 Frequency	抽出語 Extracted Words	出現回数 Frequency
橋 Bridge	73	水門 Water Gate	18
景観 Landscape	50	河川 River	17
大阪 Osaka	48	貴重 Valuable	17
昭和 Showa	40	場所 Place	17
地域 Region	37	都市 Urban	17
整備 Development	24	空間 Space	16
淀川 Yodo River	24	歴史 History	16
アーチ Arch	22	形成 Formation	15
完成 Completion	22	結ぶ Connect	15
親しむ Familiar	20	構造 Structure	15
橋梁 Bridge	19	水 Water	15
景観資源 Landscape Resource	19	明治 Meiji	15
現在 Present	19	架ける Bridge	14
地区 District	19	道路 Road	14
公園 Park	18	木津川 Kizu River	14

原城北大橋) や、「橋上からの眺望は素晴らしい、大阪港を代表する橋の一つである」(此花大橋) といった記述があることから、遠景評価や眺望点としての評価がなされている。「景観」については、「大阪市庁舎や日本銀行とともに優れた景観を形成している」(淀屋橋)、「公園とひとつになった景観をつくっている」(菅原城北大橋) 等の記述が見られることから、周辺との調和や群としての景観が評価されている。

3.3.2. 共起ネットワークによる抽出語の共起関係 特徴語上位 75 語を対象として分析を行った共起ネットワークを図で表したものが図 5 である。「河川」「景観」が「大阪」と結びついていることから、水都大阪というイメージ通り、河川景観が大阪らしい景観として評価されている。

「広場」の集団では、「河川敷」「淀川」「眺望」等の単語が共起していることから、淀川とその周辺のスペースの関係性が評価に関係していることがわかる。また、これらの単語と「親しむ」「楽しめる」等の単語に繋がりが強い。そのため、淀川を含めた河川空間の使われ方が評価に大きく影響していると考えられる。「橋」という単語に「アーチ」「ライトアップ」が結びついていることから、橋の形状や橋が生み出す夜間景観も評価されている。シンボリックな橋が多く存在することが、大阪らしさであると推測できる。



Note: The correspondence between Japanese and English terms in the figure is as follows:
 “自然”= Nature, “環境” = Environment, “親しむ”= Familiar, “公園”= Park, “河川敷”= Riverbank, “広場”= Square, “眺望” = View, “多く”= Many, “場所” = Places, “楽しめる”= Enjoy, “整備”= Development, “空間”= Space, “貴重”= Precious, “水辺”= Waterfront, “景観資源”= Landscape Resources, “地域”= Region, “大阪”= Osaka, “水”= Water, “河川”= River, “景観”= Landscape, “淀川”= Yodo River, “工事”= Construction, “大正（赤）”= The Taisho period, “架橋”= Bridge Structure, “橋梁” = Bridge, “形成”= Formation, “その後”= Thereafter, “新淀川”= Shin-Yodo River, “伴う”= Accompanied, “構造”= Structure, “土木”= Civil Engineering, “ケーブル”= Cable, “地区”= District, “ランドマーク”= Landmark, “大型”= Large, “結ぶ”= Connect, “形式” = Form, “港”= Port, “一つ”= One, “採用”= Adopt, “桁”= Girder, “完成”= Completion, “橋”= Bridge, “昭和”= The Showa Period, “アーチ”= Arch, “現在”= Present, “架ける”= Bridge, “開削” = Cut, “渡船場”= Ferry Landing, “渡船”= Ferry, “大正（黄緑）”= Taisho, “優れる” = Outstanding, “計画”= Plan, “都市”= Urban, “部分”= Part, “架かる”= Bridge, “事業”= Project, “本橋”= Bridge, “ライトアップ”= Lighting, “機能”= Function, “役割”= Role.

Fig.5 Co-occurrence Network of Descriptions for Waterfront Areas

3.3.3. 水辺の考察

まず、抽出語リストから、橋や淀川

に関する景観が評価されていることがわかる。共起ネットワークにおいても、「大阪」が「河川」「景観」と共起している。このことから、水辺空間では、河川、特に淀川に関する景観が多く評価されており、大阪らしい景観とされていると考えられる。「景観」「大阪」という 2 単語が出現回数も多く、繋がりがあることからも、水辺空間が大阪らしい景観であると推測される。

水辺空間の中では、橋梁と広場が多く評価されている。橋梁については、「橋」と「アーチ」「ライトアップ」が結びついている点から、形状や夜間景観など、視覚的要素が評価に影響していると考えられる。広場については、視覚的要素である眺望景観に加え、「親しむ」「楽しめる」等の単語が見られることから、地域住民の使い方や地域での位置付け、すなわち、機能性や公共的役割といった要素が評価に大きく影響していると推測される。

4.まとめと考察

本稿では、登録景観資源制度のうち、大阪市都市景観資源を対象に研究を行った。KH Coder を用いて分析を行った結果、以下の主な傾向が浮かび上がった。

多くの景観資源において、その歴史について言及されており、歴史性が評価の基盤となっている。特に、歴史的建築物や寺社仏閣等において、建物や自然物の持つ歴史や文化的背景、既存の制度によって保全・評価されている点などが重視されていることがわかった。頻出語や共起語として、「歴史」「文化財」「伝統」「指定」等が繰り返し登場しており、評価においてこれらの点が重視されていると考える。また、現在も景観資源の持つ歴史性を感じができるかが評価に影響していることが明らかとなった。

歴史性に加え、地域住民との関わりや愛着といった地域性も、評価において大きな影響を与えている点も顕著であった。水辺空間等の景観資源では、「地域」「親しむ」「憩い」「行事」「住民」といった語が頻出しており、ハード面での価値だけではなく、日常生活における機能性や地域住民との関係性が高く評価されている。

さらに、対応分析の結果から、景観資源の種類や成立時期によって、評価の観点が異なるという傾向も確認できた。成立時期が戦前となる歴史的建築物や寺社仏閣等の景観資源では、保存の程度や外觀の意匠、伝統性が評価されている。一方で、成立時期が戦後以降の水辺や現代建築物等の景観資源では、人との関わりや機能性、空間の質、拠点性といった要素が重視されている。このことから、景観資源の評価が一様ではなく、多様な価値軸によって評価されていることが明らかとなった。

これらの分析から、大阪市の都市景観資源における評価は、歴史性と地域性という 2 つの価値を中心に成り立っており、制度的・客観的な評価だけでなく、市民の日常や感情と結びついた主観的な評価が影響していると考えられる。

今後は本稿で明らかになった歴史性以外の評価項目について、他都市の景観資源にも適応し、総合的に評価することで、有効な登録景観資源の評価手法を明らかにしたい。

謝 辞

ヒアリング調査にご協力いただきました大阪市計画調整
局計画部都市計画課の方々にここに謝意を表する。

文 献

- (1) 高橋友樹, 森田亜友美, 室田昌子: 景観資源の分類に基づく実態と課題に関する研究-東京都 23 区の景観資源の分類調査を通して-, 日本都市計画学会都市計画報告集 8 卷 4 号 , pp. 197-200,2010, DOI: https://doi.org/10.11361/reportscpij.8.4_197
- (2) 曾根高麻世, 小林正美 : 場所価値評価法を用いた景観評価に関する研究-東京・台東区浅草寺周辺の場所の価値-, 日本建築学会技術報告集 26 卷 63 号,pp. 701-706,2020, DOI: <https://doi.org/10.3130/aijt.26.701>
- (3) 高垣翔, 栗山尚子:現代建築物を対象とした景観資源の評価に関する基礎的研究-神戸市の表彰作品を事例として-, 日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系,64 号,pp.173-176, 2024.
- (4) 大阪市 : 都市景観資源（わがまちナイススポット）の概要 :
<https://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/page/0000017850.html> (参照日 2025 年 10 月 30 日)
- (5) 大阪市 : 大阪市都市景観資源登録リスト :
<https://www.city.osaka.lg.jp/toshikeikaku/cmsfiles/contents/0000017/17850/list250409.pdf> (参照日 2025 年 10 月 9 日)